

青少年の「自分さがし」に関する一考察 —— J.ボードリヤールの「他者性」論を手がかりに ——

藤井 友紀*

本論は、現代社会に生きる青少年の自我と関係性に関わる葛藤の問題に焦点を当てている。近代人の自我及び存在の不安という問題は、多くの先人によって提起され分析が試みられてきた。例えばエリクソンは青年期における自我の「危機」という問題を提起している。だが、エリクソンのいう「青年の危機」は発達過程におけるひとつの段階として捉えられ、いずれ解消されるものとされている。一方で、近年、就職状況の悪化やフリーターの増加などによって、青年期と呼ばれる年齢の幅は広がり、ひきこもりや不登校、犯罪の低年齢化など、自我をめぐる問題は、他者との関係性の問題として広い年齢層に共有されるようになった。本論は、青少年の自我と関係性の問題を、近代化に端を発する現代人に固有の問題であると捉え、特に仲間集団との関係の中で「異質さへの嗅覚」に不安を抱き「本当の自分」を模索しつつも、その獲得を阻害する仲間集団との関係性を維持せざるを得ない青少年の行為について、主にJ.ボードリヤールに依拠しつつ、理解の図式を構築しようとする試みである。

キーワード：みんなぼっち、自分らしさ、他者性、排除、身代わりの山羊

目次

はじめに

1. 「やさしい」関係

- (1) 自我の揺らぎ
- (2) 「みんなぼっち」の関係
- (3) 第1側面——自我アイデンティティ

2. 排除と同調

- (1) 「ムカツク」嗅覚
- (2) 排除と同調
- (3) 第2側面——社会的アイデンティティ

3. 「自分らしさ」願望の行方

- (1) フラクタルな主体へ
- (2) 第3側面——生産される「自分らしさ」
- (3) 他者性喪失の二重性

おわりに

はじめに

「自分らしさ」や「本当の自分」という言葉を目にすることがある。大抵の場合、特に10代から20代の青少年層に向けた商品広告の中に特に見受けられる表現である。

では、ここで言われる「自分らしさ」や「本当の自分」とは一体どういったものだろうか。

あるコンタクトレンズのコマーシャルである。

一人の女子高校生が、コンタクトレンズを購入した。眼鏡を外した彼女は笑顔でキャッチコピーを告げる。「ほんとの私、デビュー¹⁾」。それは、短いCMの中で何気なく提示される。だが、彼女は本当に「ほんとの私」に変わったのだ

*立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

ろうか？

彼女は外見的には単に眼鏡を脱ぎ、素颜になったにすぎない。しかしこのCMでは、彼女は眼鏡を外すことによって「ほんとの私」に「変身」したのである。つまり、ここでは象徴的な意味で眼鏡が彼女の「ほんとの私」を妨げる「殻」として取り扱われているといえる。彼女は眼鏡という「殻」を脱ぎ捨てることによって「ほんとの私」に「変身」したのだ。それが外見だけのものなのか、内面的な何らかの変化が伴っているのかはここでは関係ない。重要なのは、彼女の外見的变化が「ほんとの私」への変身と同義とされる点である。つまりこのCMにおいて「ほんとの私」は「眼鏡＝殻」を脱ぎ捨てることによって転身可能なものである。しかもこうした、ほんの些細な変化を「本当の自分」と呼ぼうとする傾向は、単に商品広告のみならず、ドラマや映画、小説などのあらゆる側面に見いだされる。

だが、規格化され誰でも購入可能な商品を手にすることで得られる「自分らしさ」とはいったい何なのだろうか。CMの少女は、素颜をさらすことで内面的にも「素の私＝本当の私」になれたのだろうか。「もしある人が自分自身であるなら、『本当に』自分自身になる必要があるだろうか。……もし私が私自身なら、どうして『今までよりずっと本当の』私自身になったりできるだろうか²⁾」というボードリヤールの疑問は、私たちがこうした表現に接した際に感じる疑問を明確に代弁している。

とはいえ、一口に「自分さがし」といっても、いくつかの異なる様相があるように思われる。単に漠然と「自分らしさ」を求めるような「自分探し」だけでなく、「ひきこもり」のように自分の殻に閉じこもることで自我の安定を図る

うとする行為もまた、「自分探し」の一つの形式ではないだろうか。

本論ではこうした「自分探し」の形式の中でも、最も「自分らしさ」という問題に対して無自覚であるがゆえに、諸々と周囲の状況に流されてしまう型について述べたものである。それは、問題に対して無自覚であるという点において、その型の「自分探し」がもっとも問題性を帯びていると考えるからである。

「本当の私」を模索すると一言に言っても、それがどんな「本当の私」なのかという共通認識もなければ、どのような「本当の私」がいかなる動機によって求められているのかも明確ではない。そこでまず、「自分らしさ」という概念についても、「自我アイデンティティ」「社会的アイデンティティ」「自分らしさの記号」という3つの側面から考え、こうした傾向の背後にある問題を「他者性」の観点から分析する。

1. 「やさしい関係」

（1） 自我の揺らぎ

近年、青少年の自我意識が揺らいでいるという見解が若者論などの中にしばしば見られる。だが、こうした青少年の自我の揺らぎに関する言説は、決して新しいものではない。

栗原彬は1981年の『やさしさのゆくえ＝現代青年論』の中で、高度経済成長期以降の生産力至上主義を土台とした管理社会における青少年の「アイデンティティ拡散症候群³⁾」に言及している。松原治郎も60年代末から70年代の初め頃の青少年について、やはりアイデンティティの拡散状況を示唆している⁴⁾。

こうした点から見ると、現在に連なる青少年の自我の揺らぎに関する言説は、主に60年代

末の大学紛争が収束を迎える頃から70年代の低成長期にかけて起こったといえる。それ以降、80年代までは「豊かな社会」における物質的価値や偏差値競争に、青少年の自我の問題や他者との関係性の問題の原因を見つけ出そうとする傾向が強かった。その後、94年に博報堂生活総合研究所が行った調査では、若者たちの新たな関係性の特徴が「まさつ回避世代」と名付けられた⁵⁾。それから10年を経た現在、こうした新たな関係性の様相は、ひきこもりや自分探しなどの形をとって、自我それ自体の問題へと発展した。

自我の発展の過程で個人は、まず「意味ある他者」との同一化によって「一般化された他者」を獲得する⁶⁾。バーガーとルックマンは「自分はまさしく自分がそれであると考えている当の人間なのだ、という確信を維持するには、人は偶然的な日常の他者との接触でさえもが与えてくれるであろうこのアイデンティティの暗黙裡の確認を必要とするばかりでなく、彼にとっての意味ある他者が彼に与えてくれる、明白で、情緒的性格を帯びた確認をも必要とするのである⁷⁾」という。

幼時に経験する第一次社会化の場合、準拠集団は家庭であり、「意味ある他者」には両親あるいはそれに代わる立場の人間があてられる。ほとんどの家庭の場合、この時期の情緒的なアイデンティティの確認は自然に行われている。ここで獲得する「一般化された他者」つまり規範は家庭の規範であると同時に、家庭が属している社会の基本的な社会規範でもある。

次に、子どもは学齢期になると家庭を離れ、一日のほとんどを学校の中で同輩集団と共に生活する。特に中学生や高校生の場合、年齢的特性から、学校組織よりもむしろ、仲間集団を準

拠集団とし友人を意味ある他者に位置づける。こうした中、彼らは互いに「鏡に映った自己」として、相手の反応から自らの姿を客観的に認識しようとする。そうして複数の他者から取得した自分の姿を客観的条件と重ね合わせ、複合的に統合することによって、自己イメージとしての自我アイデンティティが成り立つ。

A.ゴッフマンによれば、「自我アイデンティティ」とは「個人が多様な社会的経験を経た結果、獲得するに至った自己の状況、自己の持続性、性格などについての自己了解⁸⁾」である。それは、自らの行為に対する「意味ある他者」の視線を享受することによって形成される。この自我アイデンティティは無論、各個人の自己肯定の度合いに応じて、肯定的にも否定的にもなりうるが、個人が社会において自信を持って行為し、周囲との関係を良好に保つには、安定的で肯定的な自我アイデンティティが必要だといえよう。安定した自己実現のためには、自我アイデンティティの肯定的な方向での安定は欠かすことができない。しかし、現在、この自我アイデンティティの安定が揺らぎ始めているといわれている。

（2）「みんなぼっち」の関係

1990年代、精神科医の大平健は、軽い精神的な不安を訴えて精神科を受診する患者が増加していることに着目し、そうした「よろず相談の患者」には共通して他者との関係性の問題があることを指摘した。大平によれば、こうした患者は多くの場合、「モノ」を通して他者との距離を測り、「個性」「能力」「自己実現」「健康」「やる気」など自分の内面性の大部分でモノに依存⁹⁾する「モノ語り」の人々だった。

この「モノ語りの人々」という概念によって、

個人の他者との関係性が、モノを介した関係性となり、モノを介しているために他者との同一化も困難になってしまったという状況が指摘されたことになる。

さらに、こうした「モノ語り」の人々の関係は、モノを挟んだ関係から、「相手の気持ちに踏みこんでいかぬように気をつけながら、滑らかに暖かい関係を保っていこうと¹⁰⁾」相手との間に「^{つよ}強いやさしさ」という概念を挟んだ関係へと変化する。

1970年代に栗原彬が「やさしい」青年像を描き出し、「強いやさしさ」から「受け身のやさしさ」への移行¹¹⁾を指摘したが、大平はこれを「治療としての『やさしさ』」から「予防としての“やさしさ”」への変化と捉える。ここでは、互いに相手の内面に深入りしないことを前提とした、人を傷つけないための「やさしさ」によって、滑らかな人間関係が保たれる。

こうした「濃密なコミュニケーションなどという『うざったい』ものは避けられるべきものである」にもかかわらず、集団としてまとまろうとする関係のあり方を藤村正之は「みんなぼっち」と名付けた¹²⁾。藤村によれば、「みんなぼっち」の行動様式にはふたつの特徴がある。ひとつには「外部との境界線に意味があり、そこでの範囲にコミュニケーション回路を限定するということ、その一方、その内部空間には親しさと希薄さがともに漂い、「みんな」でまとまりつつもその中の成員それぞれは「ひとり」である点である¹³⁾。彼はこうした傾向について、他者との摩擦を経験するような機会の減少に注目している。94年の博報堂生活総合研究所の調査でも、誰とでもコミュニケーションを取り、仲良くできると言っているにもかかわらず、意見の合わない人には近づかないという若者の関

係性のあり方が示されている¹⁴⁾が、藤村は、こうした状況によって、若者の周囲の人間が「意味ある他者」としての役割を果たせなくなり、プレイ段階からゲーム段階に進むことが出来なくなっていると指摘する。こうした状態では、一般的な規範が通用せず、いちいち相手に応じた対応を考えねばならない。「そのようなことで心を煩わされないためには、距離感を持った人間関係でやさしさを示していくほうが効率がよい」というわけである¹⁵⁾。

だが、70年代に栗原彬に指摘されたような「やさしい」世代に育てられた90年代（あるいはそれ以降）の青少年は、「意味ある他者」としての家族との関係から、そもそもこの「受け身のやさしさ」を行為規範として獲得しているとは言えないだろうか。そして、行為規範として「やさしさ」を獲得した彼らが形成した第一次集団としての同輩集団が「やさしい」関係を保つことを求めることも忘れてはならない。彼らが考え方の合わない相手との接触を避けるのも¹⁶⁾、大平の事例にあるように関係性の保ち方が「ホット」な相手との接し方に戸惑うのも¹⁷⁾、「やさしさ」という行為規範に従った結果である。同じ規範を持ち、なおかつ考えの合う相手としか接触することが出来ないという状況を招いたのは、藤村の言うとおり、一面では彼らの人間関係のバリエーションの薄さが原因かもしれない。しかし、それは彼の言うように「一般化された他者」の像が明確に結ばなくなったが故の問題と言うよりは、むしろ、「やさしさ」への過剰適応であると思われる。

また、藤村とは逆に、辻大介は青少年の関係性は希薄化していないという観点に立ち、「場面にあわせて気軽にスイッチを替えられる」ような対人関係の「フリッパー志向」が強まって

いると述べた¹⁸⁾。確かに彼らの関係性は場や相手に応じて対応を変える形で成り立っているし、そうした指向性への変化という指摘は市場の求めに応じた自己を呈示するE.フロムの「市場的性格」や「だれに対してでも、すばやく反応する能力¹⁹⁾」をもっているとされたD.リースマンの「他人志向型」などの特徴を引き継いだものである。しかし、どんな場面や相手対しても自由に対応を変えられることと、考える合う相手を取捨選択した中で、相手に応じた対応をとことは同じではない。若者たちの「フリッパー化」を単なる指向性の変化と結論づけるのみという点で、辻の見解もやや一面的にすぎる感がある²⁰⁾。

（3）第1側面——自我アイデンティティ

「自分らしさ」願望はまず、第1側面の「自分らしさ」を求めるための「自分探し」にはじまる。それは、自我アイデンティティとしての「自分らしさ」である。個々人がより社会や集団に適応するために、あるいは自らの選択や行為に自信を持つために、何らかの方法で自身が肯定できるような理想的な自我アイデンティティを獲得しようとする。それが現代の「自分探し」である。

だが「自分さがし」の形もひとつではない。そこで、本編で特に焦点を当てるタイプの「自分探し」を「みんなぼっち型」と名付けることにしたい²¹⁾。このタイプの「自分探し」は仲間集団を形成することで「自分らしさ」を獲得しようとする。コミュニケーションへの意欲は高く、話題に応じた複数の集団を使い分けることが出来るが、考えの合わない相手との接触は避け、外部の集団とは没交渉となる。「自分らしさ」とは何かについては漠然と「今の自分は本

当の自分ではない」と考えている。

「みんなぼっち型」の場合、「やさしい」関係の中で「自分らしさ」を確認するために「とりあえず、いれば安心」という感覚をもって²²⁾仲間集団が形成される。しかしその中で彼らは「周りから定義づけられた自分らしいっていうのがあって、ホントの自分らしいっていうのはこっちに曲がりたんだってわかってるんだけど、周りからの<らしさ>要求があって、まっすぐ行かざるをえない²³⁾」と感じつつも、やはり「他人にどう思われてるかっていうのは、めっちゃくちゃ気になる²⁴⁾」と述べるのである。ここでは、彼らが追い求める自我アイデンティティの理想的姿と、集団に所属することで強化される自我アイデンティティとの間の齟齬が問題となっている²⁵⁾。

それは言い換えれば、彼らが仲間から獲得する「鏡に映った自我」の姿と理想とする自己イメージとの齟齬であり、それはすなわち、彼ら自身が仲間に呈示する社会的アイデンティティと理想の自己との齟齬であるといえるだろう。次章では、この齟齬について、仲間集団における排除の面から考察する。

2. 排除と同調

（1）「ムカツク」嗅覚

現代の子ども達は学校で「いじめられないためにはどうすればいいか——と問われて、目立たないこと・他人と違うことをしないことと答える」という²⁶⁾。

赤坂憲雄は言う。「学校という場にはりめぐらされた不可視の規範コードに、齟齬をきたし、あるいは上手に身を寄り添わせることができない一群の子供たちがいる。……この、学校が強いて

くる均質の時間にうまく適応できない子供に手を焼き苛立っているのは、ほかならぬ教師その人であり、級友たちは教師を範としてそれに同調しているにすぎない。²⁷⁾

つまり赤坂は、学校という場を、子ども達を均質な基準によって推し量り、またそのことによって子ども達を均質化していく場だと考えている。その上で「教師にとって」負の側面をもつ子どもが、教師自身の苛立ちを持ったまなざしにさらされることが、他の子ども達の行為にも影響を及ぼしているのである。それは、赤坂が挙げた教師の例のように、あからさまな形で特定の生徒にスティグマを与えることもあれば、教師自身は無自覚なままに、彼の無意識の仕草や口調に現れる苛立ちを子どもの側が内面化する場合もあるだろう。

だが、近年のいじめは、こうしたいわば大人の側から見て負のレッテルを貼られた子どもにのみ作用するものではない。いじめの対象は負のレッテルのみならず、成績が抜きんでいたり、教師の覚えがよかったりするような子どもにも及んでいる。「共同化された疎外や排斥の矛先が、正・負いずれであれ、集団のなかのある種逸脱した部分に向けられている²⁸⁾」と赤坂は言い、それをもっていじめの傾向の変化と捉えている。

だが、いじめの性質の変化という点において、現在のいじめに特徴的であり、かつ問題であるのは、むしろ「いかなる生徒もその役割から全く無縁であり通すことが不可能な状況²⁹⁾」の方であろう。今や、いじめは単に集団の中で正・負の方向に突出した特定の個人に対する攻撃ではあり得ない。どちらにも突出することなしに、仲間とごく「普通の」日常を送っていた子どもであっても、ある朝突然いじめの対象となりう

る。

このいじめの対象は「嗅覚のようなもの」で嗅ぎつけられるのだという。彼らのコミュニケーションのあり方が「みんなぼっち」の「やさしい」関係であることをふまえると、学校でのいじめも街での仲間集団における排除も同様の構造を持っているといえる。過度のいじめによってクラスメイトを自殺に追いやったある少年も、「いじめられる側は、やはり、その要素を持っているように、ぼくには思える。まわりと違うものを感じると、それをとがめるような心理を持ちがちになる。……それのどこが、いじめられっばいか、となると、説明に困るんですが、嗅覚みたいなもので、感じとっちゃうんだなあ。³⁰⁾」と言う。

「やさしい」関係を円滑な人間関係を維持するための指針として集っている若者たちにとって、相手と深く関わることは互いに傷つけ合う可能性を含んでいることを理由に避けられるべきものである。博報堂生活総合研究所の調査結果からも、その傾向は見て取れる³¹⁾。大平のいう「やさしい」基準に照らしていえば、仲間の意見を否定したり、その理由を問うことは相手に対して「やさしく」ないということになる。自我アイデンティティ形成のために肯定的な他者との関係を失うことの出来ない「みんなぼっち」の若者たちにとっては、互いの言動を丸抱えに肯定し合っても「みんなでいる」ことが重要なのである。

D. リースマンは彼の言う「他人志向型人間」について「不定的な『不安』」こそがその心理的な装置となっていることを指摘し³²⁾、他人志向型の若者が「自分が仲間はずれにされることへの恐怖」を強く持っていることを示した³³⁾。彼によれば、その恐怖は「この（リースマンが

行った10代の若者グループへの）インタビューに関する限り、実にすさまじいもの³⁴⁾だったと述べる。これと同様に「仲間はずれ」への不安は、「やさしい」関係の中にも浸食している。

齋藤孝は、「ムカツク」という若者言葉に「いじめ（排除）の合い言葉」としての一面があることを指摘した。「誰がいじめの対象になるか、ということには、はっきりした理由がないことも多い。『ムカツク奴』というレッテルが認められれば、それで十分いじめの対象とされたことになる³⁵⁾」。互いに相手に深入りせず、濃密なコミュニケーションを取ることもない「やさしい」関係の中では、一見、排除の生じる余地はないように見える。それぞれが集団内において「ひとり」であり、「自分らしく」あらうとしていて、他者を傷つけるような言動を極力避けようとするからである。しかし齋藤は「ムカツク」という若者の言葉について、小学生から大学生までの幅広い年齢層に調査を行い、この言葉が「自分の領域に他人がずんずん入り込んでくるのを嫌う感覚³⁶⁾」であると分析した。それは、互いに踏み込むことを避け、押しつけがましさを嫌う「やさしい」関係と無関係ではない。むしろ、「やさしい」関係性の定着こそが、「ムカツク」という感覚につながっているともしえる³⁷⁾。

「やさしい」人たちは、かように他人や自分が傷つくことには敏感ですが、すでに傷ついていることには妙に鈍感な傾向があります。…イビル側が、もしかして傷ついていて、その鬱憤を晴らしているのではないか。そんな風には考えてもみないようです。また、イビラれている側が傷ついているだろうとも考えません³⁸⁾」と大平が指摘するように、「やさしさ」を

他者と接する際の行為規範とした若者たちは、他者が別の行為規範を持って接してくることを考慮に入れていない。彼らにとっては「やさしさ」が当たり前のものであるが故に、他者にも「やさしさ」を持って接することが自然と期待されるのである。その結果、それとは異なる行為規範に基づいて他者と関わりを持つ相手を「やさしくない」「押しつけがましい」「考えが合わない」として一方的に遠ざけることになる。同時に、「やさしい」関係性の規範を共有した者同士の中でも、考え方の不一致などの葛藤の元となる要素は「やさしくない」として遠ざけられてしまうので、「仲間はずれ」への不安を抱えた若者たちは「やさしさ」を盾に仲間の言動を否定することをしない。

だが実際の所、この問題はもう少し深刻である。若者たちが単に「やさしさ」によって相手を気遣い、相手の「ムカツク」という言葉に同調しているだけであれば、それは単に親しい友人間で交わす冗談として捉えることも可能であるだろう。また、「ムカツク」相手が仲間集団の外部に位置する存在、つまり親や教師であれば、軽い鬱憤晴らしに留まることもある。だが、「ムカツク」相手が仲間集団の内部に現れ、しかも「ムカツク」感覚への同調が「やさしい」気遣いからではなく、ある種の自己保身から生まれるとき、仲間集団からの排除につながる問題が表出することになる。

（2）排除と同調

齋藤の調査の回答に以下のようなものが挙げられている。

「一人が『あいつムカツク』というとき次の日からムシされたりしている子もいた。今思うとムカツクという言葉は、“あいことば”のよう

だった。とりあえず同じになってムカツクといったら安心だった気がする。かといって別に大してそれほど頭にきていないことが多い。」

斎藤は「ムカツク」感覚を生理的な嫌悪感であると位置づけた。それ故に、彼は「これが、いじめのきっかけになるときは、明確な理由がないので、逃げるのがむずかし³⁹⁾」く、しかも「誰がいじめの対象になるか、ということには、はっきりした理由がないことも多い。『ムカツク奴』というレッテルが認められれば、それで充分いじめの対象とされたことになる。⁴⁰⁾」と指摘する。ここにおいて、「ムカツク」感覚への同調は、「やさしい」関係を維持するための気遣いではなく、自分が排除されないための同調となる。

さらに、『『むかつく』という言葉をまず最初に発することで、自分の権威(?)を誇示していたような気がした。……また、中学校でのグループの中では、『むかつく』という意志を最初に示した人は、一種の恐い人間と見られ、またそれが私は快感だった。⁴¹⁾』という回答からは、「ムカツク」感覚を最初に口にした人間が集団の中心となり、それに同調し「ムカツク」相手を排除することによって集団の結束を固める状況が垣間見られる。こうした排除における問題は、排除される者が集団の外部に存在する者ではなく、あらかじめ「やさしい」関係性の規範を共有し、そのなかでも考えの合う者同士で形成されたはずの「みんなぼっち」の集団内に存在する者である点である。

「みんなぼっち型」の集団の場合、成員それぞれの性質はE.デュルケムによって「もっぱら自分自身に心を傾注していて、外部の世界に興味をおぼえない⁴²⁾」といわれた、アノミーとエゴイズム双方の特徴を兼ね備えた人間像に近

い。こうしたエゴイズム的な特性を強く持った個々人の集合においては、成員はそれぞれ自分自身にのみ関心を向けているので、全体と各個人との間の「観念や感情のたえざる交流」による集合的エネルギーを維持することは出来ない。しかも彼らの共通する関係性の規範は互いに干渉しないことを旨とする「やさしさ」であるから、まさに「みんなぼっち」の集団は単に寄り集まっているのみの、集団としての凝集力を持たない集団ということになる。

しかしながらそうした状態では、集団は常に分裂の危機にさらされる。他者の視線を確保することで自我を安定させようとする「みんなぼっち」の集団は、この集団としての目的のために、R.ジラールが言うところの「身代わりの山羊」を選出し、成員達の意識を一人の排除に向けてことによって集団としての安定を取り戻そうとすると考えられる。つまり、「みんなぼっち」における排除は、ジラールの場合のように、単に成員がそれぞれ模倣による対立状態にあるために分裂の危機にあるのではなく、成員相互の連帯を持たないために、分裂の危機に立たされるのである。

このとき、排除対象がいかにして選出されるかについて、ジラールは「人種的・宗教的少数派は、自分たちに対抗するものとして、多数派を引き寄せやすい(*tendre à polariser*)。無論、それぞれの社会ごとに相対的ではあるが、原則としてはどんな文化にも共通するような(*transculturel*)犠牲者選択の基準がそこにある。⁴³⁾」という。それはまた身体的な違いなどによっても生じるが、「しばしば(*de temps à autre*)極端な場合には、ただ富める者と貧しい者のみならず、成功と失敗、美しさと醜さ、悪徳と美德、人を引きつける力と不快にする力

など、あらゆる極端な性質こそが集合的な非難をもたらす⁴⁴⁾」と述べる。

先に述べたように、現代の子ども達の集団における排除は、正負のどちらかに突出していること以上に「ムカツク」という感覚的な「人を不快にする力」である。こうした状況が起こるのは、差異が喪失し、互いが分身化するからだ。とジラルは述べる。彼によれば、差異のない状態では、個々人は互いに模倣しあう関係になる。そして、この相互の模倣関係が個々人を対立関係に押しやることになる。しかもこの「この悪しき相互性（*reciprocité mauvaise*）」は、人間をたがいに対立させるが、行動を画一化しもあることとする。……いささか逆説めくけれども、同一であることの優越性（*prédominance du même*）をもたらすのも、この悪しき互酬性である⁴⁵⁾」し、「欲望は常に模倣性を高めるが、その強さに対応して、欲望を崇拝する者たちは、個性化するどころか、ますます相互に交換や置き換えが可能な存在に変わる⁴⁶⁾」というから、欲望が模倣された先にあるのもまた、個々人の均質化であり、差異の消失状態なのである。

この点について、赤坂憲雄は「微細な差異の競い合い」のなかでの「差異の体系の再編」に言及する。「分身と化した似たりよったりの成員のなかから、ほとんど取るに足らぬ徴候にもとづき、一人の生け贄（スケープ・ゴート）が選出される⁴⁷⁾」、すなわち嗅覚的なものによっていじめの対象が決定される状況は、差異が消滅した共同体のなかで、異質なものを選び出し排除することによって、互いの均質性を確認しあい結束を固めようとする、秩序の安定のための「供儀」なのだと赤坂は指摘する。「明らかな差異の具現者が存在するから、いじめが起こるわけではない。むしろ、差異はあらかじめ

存在するのではなく、そのつどあらたに発見され、つくられるのである。むしろ、排除というたったひとつの現実に向けて（傍点引用者）⁴⁸⁾」と結論づける点において彼の主張は、「嗅覚のようなもの」でいじめの対象を選び出すという青少年の仲間集団についての考察として、非常に意味深い⁴⁹⁾。

ただし、彼はこうした差異の喪失状態の原因を学校教育による人格の均質化に求めた。「仲間よりもぬきんでいたり、あるいは仲間からちょっとはずれていたりする人間たちを、同じような鋳型にはめこむ努力、それが子供たちの社会でおこなわれている⁵⁰⁾」とはリースマンの言だが、「みんなぼっち」の集団における差異の喪失状態は、むしろこうした仲間集団内において、互いにとって「やさしくない」部分を取り払っていくことによって、同質的な仲間で作られた集団を作ろうとするところにあると思われる。その結果、成員間の連帯の欠如から生じた仲間集団の分裂の危機に際し、一人の排除に向けて成員たちを団結させることで、この危機を乗り越えようとして、差異なき成員間に差異が作りだされることになる。

排除が実際に行われるとき、その対象に対して、彼らの関係性の指針である「やさしさ」が向けられないのは、ふたつの側面があると思われる。ひとつにはすでに述べたように、最初に「ムカツク」を表明した集団内の権威者への同調である。感覚的で理由のない「ムカツク」というレッテルを貼られ、排除の対象とされることを避けることがその理由である。

その一方、「みんなぼっち」の関係は「コミュニケーションを一定程度良好にとることができる、あるまじきものがあるのだが、そのまじきの外とはうまくいかないし、うまくいかせよ

うともしない⁵¹⁾」という藤村の指摘が、もうひとつの理由を明らかにする。つまり、「ムカツク」というレッテルを貼られ、排除の対象とされた時点で、その個人は集団内にありながらも集団の周縁へと追いやられることになる。しかもその他の成員は「ムカツク」感覚を最初に表明した権威者を中心に結束を固めているから、彼らは仲間集団という大きな境界の内部にありながら、その中にもうひとつ「ムカツク」感覚によって結合された求心力の高い集団を形成することになる。外部とのコミュニケーションを「うまくいかせようとしなさい」この集団の成員達にとって、仲間集団の周縁に位置する「ムカツク」レッテルを貼られた個人は、集団内の存在でありながら、既に「やさしさ」を向けるべき仲間ではない。だが、それでもなお、集団の結束と秩序化のためには排除が必要であるために、仲間集団の内部に「ムカツク」対象は常に存在しなくてはならない。排除する相手がいなくなれば、また新しい対象を選び出せばいい。排除されたくなければ、他の成員と手を組んで先に誰かを排除すればいい。こうして排除の構造ができあがることになる、

リースマンらによって呈示されてきた現代的な性格の流れを汲んだ日本の若者たちは、はじめ、他者を指針としつつも、「やさしさ」を介することによって相手との距離を保とうとした。それは他者を慮る優しさではなく、他者を思いつつも自らが傷つくことも予防するための「やさしさ」だった。だが、大平の『やさしさの精神病理』には、一方的ながらもまだ他者を傷つけまいする「やさしい」人々が描かれ、「やさしさ」とは行動原理を異にする相手に対しても彼らの「やさしさ」は向けられていた。しかしこの時には既に「ムカツク」という感覚

を介し、自分にとって異質なものを排除しようとする傾向は現れていた⁵²⁾。一方的であれ他者を慮り、傷つけまいとしていた「やさしさ」はいつしか自らに向けられることになった。そうして「傷つけないこと」から「傷つかないこと」へベクトルを変えた「やさしさ」の定着は、次第に他者に対する鈍さを助長し、「ムカツク」という感覚を生んでしまう。その結果、若者たちの関係性は「予防としてのやさしさ」から、今や「予防としての排除」を介した関係となってしまった。

（3）第2側面——社会的アイデンティティ

この集団からの排除とそれに対する不安が、第2の側面の自分探しを生み出すことになる。本論における「自分探しの」第2側面は「社会的アイデンティティ」としての「自分らしさ」を模索することである。それは、ある個人が通常周囲の他者に向けて呈示している「自分らしさ」であり、あるいは他者からの要求に応じて呈示する「自分らしさ」である。

仲間集団などに準拠しようとする時、個人は自分が所属しようとする集団の価値規範や行為規範などを学ばねばならない。これが第二次社会化である。

第一次社会化の場合、特殊な場合を除いて、家庭は子どもが適応的であるか否かに関わらず彼を受け入れ、準拠集団であり続ける。しかし第二次社会化の場合、個人の準拠集団は、無条件で彼を受け入れるわけではない。個人は集団の規範を内在化し、それに従って行為する限りにおいて集団の成員でいることが出来るのである。このとき個人が、自分がその集団に適応していることを指し示すために周囲に対して呈示する属性が「社会的アイデンティティ」であ

る。

ゴッフマンは「社会的アイデンティティ」を「予想された行為から顧みて行われる性格付与」である「ヴァーチャルな社会的アイデンティティ」と「事実もっていることを、求められれば明らかにし得るカテゴリー」である「アクチュアルな社会的アイデンティティ」のふたつに分けた⁵³⁾。

「みんなぼっち」の集団は、元々は「自分らしさ」を獲得するという目的のもとに形成される。この集団内では、「自分らしい」ことが最も重要な価値となる。しかしそうなると、集団内で第1側面の「自分らしさ」獲得を目指して他者の承認を得るためには、逆説的だが、「自分らしい」ことを仲間を示さねばならなくなってしまう。本来なら、ここで集団に対し各個人は「アクチュアルな社会的アイデンティティ」としての「自分らしさ」を呈示すればよい。しかし、「やさしさ」を介した関係性の中には、先に述べた排除の問題が横たわっている。ここで呈示した「アクチュアルな社会的アイデンティティ」としての「自分らしさ」が仲間集団に承認されなければ、彼は集団から排除されてしまう。その危険を避けるためには仲間集団が認める「自分らしさ」を呈示しなくてはならない。だが、皆が共通して獲得し、葛藤を引き起こさずに呈示できるような「自分らしさ」はあくまで趣味などの表面的な部分に限られる⁵⁴⁾。こうして、各個人は話題に応じて話す相手を変える⁵⁵⁾という形でいくつかの集団に所属し、それぞれが求める「ヴァーチャルな社会的アイデンティティ」としての「自分らしさ」に併せて「アクチュアルな社会的アイデンティティ」を分断し、「自分らしさ」として呈示する。

「みんなぼっち型」の自分探しの場合、あく

まで仲間集合することで、他者の承認を得て自己イメージを強化しようとするから、この傾向が特に顕著に現れることになる。ここでの問題は、つまり彼が持っている総合的な「自分らしさ」としての趣味や特技などが細分化され、それぞれ別個の「ヴァーチャルな社会的アイデンティティ」として別の集団に呈示されることにある。通常、個々人はある特定の属性を「スティグマ」として隠すことはあるにしろ、「ヴァーチャルな社会的アイデンティティ」に対して「アクチュアルな社会的アイデンティティ」を適宜呈示することで、より総合的な他者からの評価を得て、総合的に自我アイデンティティを形成することが出来る。しかし「みんなぼっち型」の場合、ある属性が、ある集団に属している時には「自分らしさ」であり、別の仲間といる時にはスティグマとなるというように、評価が一定しない。この状態では、統一的で安定した自我アイデンティティを形成することは困難である。

次章では、こうした「自分らしさ」への願望と挫折の構造が、社会的な側面からも助長されている点について検討したい。

3. 「自分らしさ」願望の行方

(1) フラクタルな主体へ

「社会における個人の地位が、文明とともに増大してゆきつつある⁵⁶⁾」とデュルケムは述べ、それまで「没個人」の状態であった環節社会が有機的連帯の社会へと移行するに従って集合意識と個人意識との分別が行われてきた、と考える。近代化にまつわる議論には、一方で、こうした新しい概念の誕生という側面がある。

しかし他方、近代化の宿命として、「こんなに

ち、究極かつもっとも崇高なさまざまな価値は、ことごとく公けの舞台から引きしりぞき、あるいは神秘的な生活の隠された世界のなかに、あるいは人々の直接の交わりにおける人間愛のなかに、その姿を没し去っている⁵⁷⁾」と述べたM. ヴェーバーのように、近代化によって失われてしまった諸価値という側面も強調される。J. ボードリヤールもまた、こうした近代化による喪失を問題にしている。彼は「ラディカルな他者性 (l'altérité radicale)」という概念と、その近代化による喪失を指摘し、現代の多くの問題にこの「ラディカルな他者性」の喪失が関わっていると考える⁵⁸⁾。

ボードリヤールによれば、「ラディカルな他者性」は比較する事も理解する事もできない絶対的な「理解不能性」である。近代的な合理化が進展する以前の主体は、こうした本人にすら理解できない絶対的な独自性を自分自身の内面に抱えていた。それ故に個々人はそれぞれが「聖なるもの」でありながら、すべてを理解し合うことの出来ない個々の存在でありえた。

「ラディカルな他者性」は、「魂や影や鏡に映った像のように、自らの他者として主体につきまとい、主体が自分自身であると同時に自分にすこしも似ていないという状況をつくりあげ⁵⁹⁾」ることによって、個人に、自らの内部にある理解不能性についての葛藤を抱かせる。同様に「ラディカルな他者性」をもった個人の間にはその理解不能性と独自性故の対立や葛藤が引き起こされることになる。だが「ラディカルな他者性」をもつが故に人間はそれぞれ独立した「個人」であり得たとボードリヤールは考える。そして彼はこの「ラディカルな他者性」の喪失の原因を、西欧的な近代的合理性の進展に求めた。西欧近代の合理性は、科学的なものへの信

仰とともに、本質的には理解できないものである「ラディカルな他者性」をすべて科学的な現象、科学的に説明可能なものとして単なる「理解可能な差異」におきかえてしまった。しかしこの合理化の進展は人間と世界の外部に存在する事象を説明し、理解可能なカテゴリーに包摂し尽くした後、「内爆発 (implosion)⁶⁰⁾」によって人間あるいは世界そのものの内的な不合理性を排除する方向へと向かう⁶¹⁾。

主体に関わる他者性についても同様に、合理化が試みられる。「ラディカルな他者は耐えがたい存在であり、皆殺しにするわけにもいかないが、かといって受け容れることはできない。したがって、取引可能な他者、差異の対象としての他者を成長させる必要⁶²⁾」があったのである。こうして対立や葛藤をもたらすことなく個々人を区別することのできる「差異」の概念が生み出されたが、「他者性は差異ではない⁶³⁾」。主体の不透明性を生み出していた「ラディカルな他者性」は目に見え比較可能な「差異」に置き換えられ、個々人は自らの行為や思考につきまとう不透明性を失い、透明な存在に転化してしまった。この状態を彼は「個人のスペクトルの拡散 (dispersion du 《spectre》 individuel)⁶⁴⁾」とよぶ。この「スペクトルの拡散」の状態において、個人は「もはや何ものかにとりつかれ (être habité) ては⁶⁵⁾」いない。個人はもはや自らを特定の役割や特定の思考様式に束縛することのない「多様な分岐の総体 (branchements multiples)⁶⁶⁾」となる。そこにはもはや、異なる他者との関係における対立も葛藤も存在しないので、互いに透明な存在になってしまった個人間の結合はもはや葛藤によって切り離されることはない。同様に、個々の主体もまた、「私」と「他者性」との葛藤をもはや覚え

ることもなく、内面において自分自身が分裂しているという感覚を抱くこともなくなってしまう。

だが、人格や個性への人間の欲求がそれで失われるわけではない。個々の人間が他者とは異なる独自の能力を伸ばし、個性的であることを人間のあるべき姿とし、人格を聖なるものとみなす個人主義への指向は、未だ近代理性の名の下に共有されている。とはいえ、個人を固有のものにしていた「ラディカルな他者性」は、西欧近代の合理性それ自体によって「差異」へと還元され、我々から剥奪されてしまった。そこで、近代は「他者性」を人為的に生産する段階へと進むことになる。それが、消費社会である。

（2）第3側面——生産される「自分らしさ」

『消費社会の神話と構造』においてボードリヤールは、大衆消費社会における差異化の始まりを一定水準の消費が社会全体に広く行き渡った状態であるとした。彼によれば、消費が理想とする幸福の形はまず「平等」の要請である。社会的に「平等」に消費が行われるようになったとき、今度は消費の「差異化」が生じる。それは一定の消費水準の中で隣家や友人達にほんの少しの差を付けるための差異化である。こうしてモノは理想型である「モデル」を元に、様々な色や形のバリエーションを付けた形で生産される。これによって差異化は、単に何色を選ぶかというような「カタログ化」された中で選択の問題に還元されることになる。こうして色や形のバリエーション、必要のない機能性などが付加価値として付与されるが、結局それらは「モデル」としてのモノの姿その物ではなく、またモノの「本当の機能」とも関係のない

微細な差異でしかない⁶⁷⁾。

主体の自我に関わる点においてもそれは同じである。ボードリヤールは「ラディカルな他者性」を失った主体において「自己同一性は、悲壮な不条理を伴う夢となる。……一切の特異性を失ったとき、ひとは自分自身を夢見て、自らを確認しようとする⁶⁸⁾」ようになると述べる。

こうした「自分自身を夢見て」いる人々に対して、消費社会は記号化された個性を消費させるように機能する。商品には「個性」や「自分らしさ」などが付加価値として与えられる。

博報堂による調査で、69.1%が「マスコミ情報は信用できない」といい、73.6%が「マスコミよりも仲間内の情報」を重視するといった結果からは、一見、こうしたマスメディアによる流行操作がもはや意味をなさなくなっているように思われる。しかし、調査項目をさらに詳細に検討すると、「人の話はうのみにせずマスコミで確かめる」が51.1%、「世の中の出来事や流行は人より早く知りたい」54.5%、「マスコミで知ったことは生活に進んで取り入れたい」61.9%と、依然としてマスメディアによる情報が重要視されていることも分かる。こうして、一見厳選したように消費者には思わせつつも、巧妙に操作された情報に従ってそれぞれの趣味や好みはカテゴリー化され、共通の話題だけでなく、その趣味に見合った服装⁶⁹⁾という「自分らしさ」という記号の付与されたモノの消費に駆り立てられることになる。第3側面の「自分らしさ」とは、こうしたモノに付与された「自分らしさ」の記号である。

だが、人々が求める「自己同一性」とは元々は、「自分が誰か」を明確にするような「個性」であり「人格」である。そこには未だ、個性や人格を「聖なるもの」とみる個性化への信仰が

根強く残されている。しかし消費社会は、この「聖性」すらも記号として生産する。これによって、「聖なるもの」としての個性は、身近で金銭によって獲得し必要に応じて消費することの出来る「俗なるもの」へと転化してしまうことになる。「モデル／シリーズの図式が作る必然的で動的な物のコンテクストにおいて、今日の消費者の心につきまとっている（hanter）ものこそ、人格の完成への真の強制⁷⁰⁾」であるとボードリヤールはいうが、この「人格の完成への真の強制」の中で、「ラディカルな他者性」を失ってしまった個人には、人為的に生産された「個性」という聖性を持たない記号を消費することしかできないのである。

（3）「他者性」喪失の二重性

「みんなぼっち型」の若者たちは、自らの趣味に応じて「自分らしさ」を示すことの出来る複数の仲間集団に所属することになる。このような相手や場面ごとにに応じて異なる「自分らしさ」を呈示する彼らの姿は、リースマンの「他人志向型」や、ボードリヤールの言う「多様な分岐の総体」としてのフラクタルな個人の姿を想起させる。

だが、「みんなぼっち」の若者たちは「やさしさ」を介した関係の中で「流されている」と感じつつも、排除を免れるために仲間集団の求める「自分らしさ」の記号を身につけねばならない。本来自己肯定と安定した自我アイデンティティの獲得を目的としていた彼らの「自分探し」は、最終的には記号的に生産された「自分らしさ」の消費にすり替わってしまい、彼らは本来の目的を達成できないまま、記号的消費へと走る悪循環に取り込まれている。だが、問題は彼らがこの構造から抜け出すことの困難さに

ある。

先に述べたとおり、ボードリヤールにとって、消費社会における記号的消費は近代化の帰結であった。近代西欧的な合理化が社会の中で人間からも非合理性を取り除き、代わりに人為的に生産した「個性」の記号を消費させるという構造が、マクロな社会的側面から若者たちに「人格の完成への真の強制」を内面化させつつ、「自分らしさ」という記号の消費に駆り立てている。

だが、それだけではない。この構造は葛藤をもたらし異質性を排除するという点で「やさしさ」を介したミクロな関係性の中にも浸透してしまっている。この点において、「みんなぼっち型」の若者たちが置かれている環境は、同輩集団というミクロ社会とそれを取り巻くマクロ社会が二重の相似形をなしているといえる。

ボードリヤールによれば、近代化は人間それ自体を合理化することによって、生理学や心理学を用いれば、どんな人間の行為や異質性も同様の原理によって説明可能であるような同一の存在に置き換えた。

同様に「やさしい」関係は、まず葛藤の元となる異質なものをコミュニケーションの範囲からはずした後に、アイデンティティを分断させることによって、単に心理学などによって解剖された人間像よりもミクロな個人的差異さえ、聖性を持たない単なる記号に変えてしまう。

「《特殊な差異（différences spécifiques）》は、産業的に生産されるので、主体がなし得る選択は初めから固定されている。残るのは、ただ個人的な区別の幻想だけである⁷¹⁾」とボードリヤールは述べる。「ラディカルな差異」が失われた中で「ラディカルな差異」を獲得しようとすれば、生産されたそれを本物と信じて消費

する以外にない。こうして、自らを他者と異なる存在として認識し、自己同一性を得ようとする個々人の「夢」は、透明な存在である自分自身に記号化した「個性」を上塗りするだけの「悲壮な不条理を伴う夢」となってしまう。この点において、相似形を取るふたつの社会構造は、互いに手を組んで巧妙に個々人から異質性を除去し、記号的な差異に置き換える共犯関係にある。

おわりに

この共犯関係にある相似形の構造から抜け出し、「自分探し」の悪循環を脱するには、「みんなぼっち型」の若者はどのような道を取り得るだろうか。

ひとつには、あまりにも完成された「自分らしさ」というものを理想化しすぎたり、そうした理想型としての「自分らしさ」に振り回されることなく、自分自身のあるべき姿、ありたいと願う姿を見据え、理想像と現実に形成される「自分らしさ」との違いを認めつつ、自己を承認することが考えられる。

だが、もうひとつの選択の方がより重要ではなかろうか。

ボードリヤールは「他者性」を失ったフラクタルな個人には、もはや同質であるが故の葛藤しか存在せず、異質であるが故の葛藤は生じないと述べた。確かに「みんなぼっち型」の自分探しを続ける若者たちは、二重の構造の中で確かに異質性を自ら手放すようにし向けられ、その結果「自分らしさ」を確認することが出来ない、というフラクタルな主体に特有の葛藤にさらされている。同質的になったが故に、「みんなぼっち」集団はさらに微細な異質性を作り出

しては排除へと向かうことになるのである。

しかし、マクローミクロ双方の社会構造が共犯関係にある状態においてのみ、彼らはフラクタルな主体でありつづける。マクロな社会構造だけでは、日常レベルの個人間の異質性までは排除することが出来ない。「やさしい」関係というミクロな社会構造との連携なくしては、フラクタルな主体は作られないのである。

そこで、「みんなぼっち型」の若者たちが異質性を排除せざるをえなくなる原因を作り出しているミクロな社会構造である「やさしさ」という関係性の規範を脱することが何よりも、まず求められる。葛藤に直面することなく他者をしつかりと見据えることも、自己を見つめ直すこともない関係性の中では、真に客観的な視点をも含んだ統合的な自我アイデンティティの獲得など望むべくもない。ましてや、そうして他者からの非難を免れる関係性は「やさしさ」を標榜しながらも他者への配慮を次第に欠き、異質性を感じさせる他者を容易に排除する構造を作り出してしまふ。

近年、経済不況の中で消費社会はすでに終わりを迎えたといわれ、あるいは情報消費社会という次の段階へ進んだともいわれる。ボードリヤールは、我々が排除してきた「ラディカルな他者性」が今や我々に「復讐」する新たなゲームの段階に入ったという。「自分探し」の若者たちは、このまま「やさしい」関係を継続し、自分たちにとって異質なものとしての「他者性」を排除し続けるのだろうか。あるいは敢えて他者性に向かおうと葛藤に向き合い、他者を見据え、「他者性」を承認することをまなびとるのだろうか。

これまで西欧的な近代化を支えてきた思想を放棄し、「ラディカルな他者性」のような「不

確実性を担う、異質な対象」に目を向ける必要があるのだとボードリヤールは述べる。「自分探し」の若者たちも、「やさしい」関係を再生産し続けてきた日本社会も、そうしたものに目を向けて行かねばならないのではないだろうか。

註

- 1) <http://acuvue.jnj.co.jp/company/cm/index.htm>
- 2) Baudrillard, 1970: 124 = 1995: 111
- 3) 「アイデンティティ拡散の症候群は、(一) 自己定義の延期や回避、(二) 目標喪失と決定の回避、(三) 自信の喪失、(四) 社会性の縮小、(五) 役割パターンの拒否、(六) 生活世界への関りの欠如、(七) 時間展望の拡散として現われる。(原文まま)」
(栗原彬, 1981, pp.181)
- 4) 松原は、総務省の調査等から各国の青年の意識を比較し、その上で日本の青年の特異性について「①ドライと、情緒的であるという一見奇妙な結びつき、②社会的視野の狭さ、③社会的役割認識の欠如(松原, pp.97)」という3点から分析した。
- 5) 「まさつ回避世代」は、
 - ①自然体: 「無理しない、我慢しない、対立しない、気にしないといった自分のところの中での葛藤を避ける、まさつを起こさないような生き方である。」
 - ②よいこ: 「楽天的な面はあるが、まじめで、素直で、前向きといった姿勢もみられる。」
 - ③低温: 「行動情報化の影響もあるが、若いのにクールで現実的である。情報や友達に対しての思い入れは弱く、インデックスとして、必要な時に、必要なものが取り出せるような関係を求めている。」
 - ④囲い込み: 「自分基準を大事にし、個を尊ぶこの世代は、個人化を実現するために自分のまわりに囲いをつくる。仲間にしても、本当に気の合った者だけをボックスのように囲い込む。」
- ⑤無性化: 「男である、女であるという境界が消え、男女の意識ギャップも小さくなった。」
の5つの特徴によって定義されている。(博報堂生活総合研究所, 1994a, pp.22)
- 6) 「意識のなかにおけるこの一般化された他者の形成は、個人がいまや単に具体的な他者と同化しているということの意味するだけでなく、他者たちの一般性、つまり社会とも同一化している、ということの意味している。こうした一般化された同一化を通じてのみ、彼の自己現認は安定性と持続性とを獲得する。」(Berger & Luckmann, 1977 pp.224)
- 7) 同書 pp.253
- 8) Goffman, 1963: 106 = 1970: 173
- 9) 大平 1990: pp.228.
- 10) 大平 1995, pp.71 (原文のまま)
- 11) 栗原, 前掲書, pp.161
- 12) 藤村はジンメルの「ふたりの孤独」概念を応用し、「みんなぼっち」概念を提起している。
- 13) 藤村「〈みんなぼっち〉の世界」(藤村・富田 1994 pp.3-14) pp.7
- 14) 博報堂生活総合研究所, 1994
- 15) 藤村 1994 pp.9
- 16) 博報堂生活総合研究所, 1994b。
「人付き合いは面倒くさいと思うことが多い」に対し「いいえ」と答えた66.7%, 「自分は誰でも友達になれる方だ」に「はい」と答えた56.8%に対して、「考えが合わない人と一緒にいることは避けている」に「はい」と答えた割合が57.2%。また、半数が「相手と意見が違っても反論はしない方だ」と答えている。この結果から、単なる「コミュニケーション上手」というよりは、考えの違う相手は受け流し、接触しないように気をつけながら、限られた仲間内でのみうまく立ち回るような若者の関係性の保ち方が浮き彫りになっている。
- 17) 大平 1995, pp.52-73 参照。ここで挙げられる事例では、ある女子高生が「ウットーシー」感覚を厭う自分たちの関係性のあり方を「ウォーム」と名付け、相手の中に踏み込んでくる相手を「ホット」な人と形容している。

- 18) 辻大介「若者のコミュニケーションの変容と新しいメディア」（船津・橋本1999 p11-27）
- 19) Riesman, 1964 pp.20
- 20) この点に関しては第3章参照
- 21) 筆者は他に「ひきこもり型」「私ドキュメンタリー型」などがあると考えているが、これについては本編の議論を外れるため、今回は取りあげない。
- 22) 「なぜかっていえば、自分らしさを確かめる手段なのね、友だちって。とりあえず、いれば安心みたいなね。」（藤村・富田1994, pp.36。）
- 23) 同書, pp.37。
- 24) 同書 pp.36。
- 25) 「ひきこもり型」の場合も同様で、自らが抱えている自己イメージを崩さないためには、他者との関係を極力少なく保たねばならない。
- 26) 赤坂憲雄1995, pp.39
- 27) 同書 pp.34
- 28) 同書 pp.37
- 29) 同書 pp.37
- 30) 齋藤孝1998, pp.103
- 31) 注16参照。「コミュニケーションを円滑にするのに必要なもの」として「同じ趣味を持つ（44%）」「べったりしすぎない（36.7%）」「相手のことを否定しない（21.1%）」という項目が目立つ。「まめに会う（54.2%）」に対してのこれらの回答は、共通の話題を接点として頻繁に連絡を取り合いながらも、しつこくしすぎたり、相手を否定したりしないように気をつけることが重要視されていることを示している。（博報堂1994b）
- 32) Riesman, 1964, pp.21
- 33) Riesman, 1964, pp.65-67
- 34) 同上 pp.67
- 35) 齋藤孝 pp.100
- 36) 同書, pp.39。
- 37) 「『相手の好みを「押しつけられる」とき』…『自分は正しいと思っていることを否定されたり、自分の領域にまで必要以上につっこんでくる相手に対して』（男大）ムカツクという回答は多い。」（齋藤, 前掲書 pp.39）
「お母さんのように直接に人の気持ちを尋ねるもの、のように間接的に人の気持ちを探ろうとするもの、どちらも私たちにとってはヤサシク・ナイ。（原文のまま）」（大平1995, pp.158）
- 38) 大平1995, pp.182-183。
- 39) 齋藤孝 前掲書, pp.101。
- 40) 同書 pp.100。
- 41) 同書 pp. 99-100。（）内は原文通り。
- 42) Durkheim, 1930 : 325 = 1985 : 361
- 43) Girard, 1982 : 30 = 1985 : 28
- 44) 同書 1982 : 31-32 = 1985 : 30
- 45) 同書 1982 : 25 = 1985 : 22
- 46) 同書 1982 : 190 = 1985 : 220。
- 47) 赤坂1995, pp.63
- 48) 同書 pp.75
- 49) 齋藤孝の調査もこれを裏付ける（第2章参照）
- 50) Riesman, 前掲書 pp.62
- 51) 藤村, 前掲書 pp.6。
- 52) 大平の『やさしさの精神病理』は95年出版。94年には既に博報堂の調査結果が「まさつ回避世代」を指摘しており、98年には齋藤の『「ムカツク」構造』が出版される。
- 53) Goffman, 1963 : 2-3 = 1970 : 11
- 54) 注23参照
- 55) 「話題により話す友達を選ぶことが多い」に68.4%が「はい」と答えている。（博報堂生活総合研究所, 1994b）
- 56) Durkheim, 1989上 : 316
- 57) Weber, 1936 : 71-72
- 58) 拙稿（藤井2002）参照。
- 59) Baudrillard, 1990 : 119 = 1991 : 152)
- 60) マクルーハンによる語だが、本論では「社会の外へと欲望の拡大が生ずる資本主義を、欲望の『外爆発』と呼び、社会の内へと欲望の拡大が生ずる資本主義を『内爆発』と呼んでおこう」（佐伯1993, pp.158）という佐伯啓思の定義に準ずる。
- 61) 拙稿（前掲）参照。
- 62) Baudrillard, 1990 : 138 = 1991 : 178
- 63) 同書 1990 : 131 = 1991 : 169
- 64) Baudrillard, 1999 : 85 = 2002 : 96
- 65) Baudrillard et Guillaume, 1994 : 37 = 1995 : 36

66) 同書 1994 : 37 = 1995 : 36

67) 拙稿 (前掲) 参照。

68) Baudrillard, 1999 : 72 = 2002 : 80

69) 「服装は個性を発揮するための手段の1つ」

70) Baudrillard, 1968 : 213 = 1980 : 188

71) 同書 1968 : 213-214 = 1980 : 188

参考文献

Jean Baudrillard, *Le systeme des Objets*, Gallimard, 1968 (邦訳=宇波彰訳『物の体系』法政大学出版局 2003)

一, *La société de consommation*, Denoël, 1970 (邦訳=今村仁司, 塚原史訳『消費社会の神話と構造』紀伊国屋書店 1995)

一, *La transparence du Mal*, Galilée, 1999 (邦訳=塚原史訳『透きとおった悪』紀伊国屋書店 1991)

一, *Le Crime Parfait*, Galilée, 1995 (邦訳=塚原史訳『完全犯罪』紀伊国屋書店 1998)

一, *L' Echange Impossible*, Galilée, 1999 (邦訳=塚原史訳『不可能な交換』紀伊国屋書店 2002)

一, *Mots de Passe, Pauvert*, 2000 (邦訳=塚原史訳『パスワード』NTT出版, 2003)

一, *Power Inferno*, Galilée, 2002 (邦訳=塚原史訳『パワー・インフェルノ』NTT出版, 2003)

Jean Baudrillard et Marc Guillaume, *Figures de l' altérité*, Descartes et Cie., 1994 (邦訳=塚原史・石田和男訳『世紀末の他者たち』紀伊国屋書店 1995)

Jean Baudrillard, 吉本隆明『J.ボードリヤール×吉本隆明 世紀末を語る: あるいは消費社会の行方について』紀伊国屋書店 1995

ボードリヤール・フォーラム編『シミュレーションの時代: ボードリヤール日本で語る』JICC出版局 1982

Peter L. Berger, Thomas Luckmann, 山口節郎訳『日常世界の構成: アイデンティティと社会の弁証法』新曜社 1977

Charles H. Cooley, 大橋幸・菊池美代志訳『社会組織論』青木書店 1970

Emile Durkheim, *Le suicide*, Quadrige, 1930 (邦訳=宮島喬訳『自殺論』中公文庫 1985)

一, 井伊玄太郎訳『社会分業論』講談社学術文庫 1989

Erik H. Erikson, 岩瀬庸理訳『アイデンティティ』金沢文庫 1973

René Girard, *Le Bouc Emissaire*, Grasset & Fasquelle, 1982 (邦訳=織田年和・富永茂樹訳『身代わりの山羊』法政大学出版局 1985)

Erving Goffman, *Stigma: Notes on the management of spoiled identity*, Simon & Schuster Inc., 1963 (邦訳=石黒毅訳『スティグマの社会学: 烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房 1970)

George H. Mead, 船津衛・徳川直人訳『社会的自我』恒星社厚生閣 1991

David Riesman, 加藤秀俊訳『孤独な群衆』みすず書房 1964

Max Weber, 尾高邦雄訳『職業としての学問』岩波文庫 1936

赤坂憲雄『排除の現象学』ちくま学芸文庫 1995

大平健『豊かさの精神病理』岩波新書 1990

一『やさしさの精神病理』岩波新書 1995

栗原彬『やさしさのゆくえ=現代青少年論』筑摩書房 1981

齋藤孝『「ムカつく」構造: 変容する現代日本のティーンエイジャー』世織書房 1998

齋藤環『若者のすべて: ひきこもり系対じぶん探し系』PHP 研究所 2001

佐伯啓思『「欲望」と資本主義: 終わりなき拡張の論理』講談社現代新書 1993

西永良成『〈個人〉の行方: ルネ・ジラールと現代社会』大修館書店 2002

博報堂生活総合研究所『調査年報 1994 若者: まさつ回避世代』博報堂 1994

一『調査年報 1994 若者: まさつ回避世代 〈資料編〉』博報堂 1994

藤井友紀『ボードリヤールと他者性』(『立命館産業社会論集』第38巻第4号 pp.199-221)

藤村正之・富田英典編『みんなぼっちの世界』恒星社厚生閣 1999

船津衛『自我の社会理論』恒星社厚生閣 1983

船津衛・橋本良明編『子ども・青少年とコミュニケーション』北樹出版, 1999

松原治郎『日本青年の意識構造: 「不安」と「不満」のメカニズム』弘文堂 1974

A Consideration of the Identity and Relationship of Japanese Young People

— from Jean Baudrillard's notion of “radical alterity” —

FUJII Yuuki*

Abstract: People have defined identification in adolescence as a problem that is characteristic of young age. However, today, any number of young Japanese who continue in their adolescence and search for their own identity augmentation, and they have anxieties concerning the relationship with their friends. In this situation, Japanese young people form their own reference group which avoids conflicts and permits a “tender” relationship. But at the same time, they feel that, in this group, they can never achieve their desirable form of identity because they have great anxiety concerning elimination from their group. This study attempts to analyze this problem under the “radical alterity” theory in Jean Baudrillard, the French philosopher. “Radical alterity” as a conflictive incomprehensibility, said Baudrillard, had formerly existed in the whole world and in the individual as the Sacred, but modernization and rationalization has exchanged these incomprehensibilities for comprehensive and rational differences. In the same way, he said, the Subject in the modern era has lost its sacred individuality as the “radical alterity”, and people have changed to become “fractal (and transparent) individualities” who can never identify.

Keywords: the loneliness in the “tender” relationship, identification, alterity, elimination, scapegoat

* Graduate Student, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University